

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520122

研究課題名（和文）大正・昭和の演劇運動が韓国の近現代劇成立に与えた影響に関する研究

研究課題名（英文）A study on the influence of Japanese theatrical movements in the Taisho and Showa eras on the formation of modern Korean theatre

研究代表者

金 鉉哲（KIM HYEONCHEOL）

東北大学・高等教育開発推進センター・講師

研究者番号：80361210

研究成果の概要（和文）：韓国演劇界における「翻訳劇と創作劇」、「古典芸能の価値」、「新派と新劇の意義」、「小劇場運動の成功と失敗」という代表的な論争には日本の演劇運動の影響が強かった。特に、韓国の知識人は日本式の演劇運動が抱えている構造的な問題を既に理解していたにもかかわらず、そのまま受け入れて同じ成功と失敗を繰り返した。このように韓国の近代・現代劇理論の成立においては、日本の演劇理論の影響が強かったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The influence of Japanese theatrical movements has been strong on “Translated Plays versus Original Plays”, “The Value of Classical Theatre”, “The Significance of Shinpa and Shingeki”, and “The Successes and Failures of the Small Theatre Movement”, four representative controversies in the world of Korean theatre. This can particularly be seen in the fact that even though Korean intellectuals already knew and understood the structural problems that afflicted Japanese style theatrical movements, they took these movements in completely and made the same successes and failures. Their actions clearly show the influence of Japanese theatrical theory on the formation of recent and modern Korean theatre.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-------------|-----------|-------------|
| 2010 年度 | 1,100,000 円 | 330,000 円 | 1,430,000 円 |
| 2011 年度 | 900,000 円 | 270,000 円 | 1,170,000 円 |
| 2012 年度 | 900,000 円 | 270,000 円 | 1,170,000 円 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,900,000 円 | 870,000 円 | 3,770,000 円 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：新劇，近代演劇，演劇運動

1. 研究開始当初の背景

20 世紀初期から日本と韓国は政治・経済・社会・文化的に密接、かつ複雑な関係を結んできた。特に、植民支配の時、朝鮮半島出身

の知識人は日本留学を通し、新しい学問や思想に接するようになった。その後、彼らは韓国を代表する近代知識人として成長したのである。つまり、韓国の近代知識人達は日本

を通して、西洋の近代文物と思想を学んだわけである。

しかし、植民支配者と被支配者という特殊な関係によるこの時期の日韓の相互関係については客観的分析に基づく研究が行われていない。特に、韓国の文化芸術界で重要な位置を占めている演劇及び公演分野の研究は皆無の状態である。

これまでの研究は「近代劇としての新劇と新派」、「小劇場運動論」、「翻訳劇論争」、「芸術大衆化論争」、「プロレタリア演劇論争」など多様な観点から公演芸術の近代と近代化が如何に行われたかについての研究が多い。しかし、日韓の影響関係の研究はほとんど未開拓の分野である。このような問題意識から筆者は、韓国近代公演芸術界の先駆者として知られる代表的な劇作家、演劇理論家、演出家である「柳致鎮 (1905～1974)」と「洪海星 (1893～1957)」の演劇理論と芸術論に関する研究を行ってきた。その結果、二人の演劇理論と芸術世界観は、築地小劇場と深く関わりがあることが明らかになった。彼らが韓国の近代劇運動の基盤を築き上げるために築地小劇場の演目をそのまま継承し、公演したこともまた事実である。つまり、本研究はこれまで研究されてこなかった日韓公演芸術の相互関係の特徴を具体化することができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大正・昭和の演劇界で形成された新しい劇理論が、韓国の近代・現代劇成立にいかなる影響を及ぼしたかを明らかにすることである。大正・昭和期には日本国内で新派劇の発展、自由劇場の消滅、築地小劇場の設立など新しい演劇運動が始まり、近代と近代化の演劇理論について多様な論争が活発に行われた。この時期に韓国の近代劇運動の先駆者として知られた知識人達が留学生として来日し、日本を通して新しい学問を学んでいた。したがって、韓国近現代劇の理論形成には、日本演劇界の影響が大きかったのである。

3. 研究の方法

本研究は、5段階に分けて進行した。

第1段階は、日韓の相互関係を立証できる客観的資料の収集と再考察である。

第2段階は、収集した資料の整理と分析作業である。資料の分析時には相互関係で発生する「反復と差」を均衡的に検討する予定である。特に、「反復」の側面は類似性と同質性という二種類の観点から検討する。表面的には似ているように見られる類似性と本質的に同じである同質性という概念を念頭に置き、どのような方法の反復であるかを具体的に区分する。

第3段階は、不足資料を補填する過程である。第2段階の資料整理と分析の過程で、日本と韓国の劇理論を比較する資料が不足した場合、さらに実証的な基礎資料を補充する。

第4段階はより深層的な資料の収集と資料の客観的な価値を検証するために専門家の助言を得る過程である。韓国側の資料は日韓比較演劇学分野の元老である高麗大学大学院文学研究科の徐淵昊名誉教授に検証を受ける。

第5段階は小論文で年間の研究成果を発表することである。関連学会（韓国演劇学会、韓国劇芸術学会）で韓国の近現代劇が日本の劇理論からどのような影響を受けたかについて研究発表し、日韓の研究者から多様な意見を聴取し、意見交換の機会を設ける。

4. 研究成果

平成 22 年度には、日韓の相互関係を立証できる客観的資料の収集と再分析を中心に、収集した資料の整理と分析作業を行った。その結果、1910 年代初から韓国の新派劇は日本の新派を模倣する方式で始まったことが明らかになった。1910、20 年代からは新聞連載記事、新小説、古典小説を脚色して多様なレパートリーを確保しようとする方向性を変えたが、当時の韓国新派劇は相変らず感傷的な家庭悲劇から抜け出すことができなかった。大部分の作品は家族間の葛藤と不幸、愛憎の交差と復讐、家庭の解体と一族の没落が主な内容だった。しかし、1930 年代中盤からは完成度が高く徹底した商業主義で運営された「東洋劇場」が開館し、日本的な色から抜け出した脚本を土台に演出、演技、舞台美術などにおける発展がみられた。このように韓国の「新派劇」は、日本の新派から影響を受けて、通俗的な商業主義を基盤とした大衆劇であり、メロドラマという様式として確立した演劇であった。

韓国の新派劇は、日本の新派から現代的な舞台装置と事実に基づく演技、よく構成された演出に影響を受けたが、前近代的な論理を擁護する内容までそのまま受け入れたという問題点も抱えている。しかし、韓国演劇史の中で新派劇が確立した「大衆的な公演としての価値」について深く考察する必要がある。韓国新派劇の限界は観客の興味を追随したことにあるが、皮肉にも韓国新派劇の限界は、少数の知識人だけを意識した結果数多くの観衆を無視することになったということにある。新派劇の最大の長所は常にその時代の観客の嗜好を反映するために努力したという観衆本位精神である。演劇は基本的に観客なしでは存在し得ない芸術である。そのためには観客の要求をよく把握するべきだが、観客の欲望を充足させながらも芸術的な価値

を維持するのは至難の技である。いずれにせよ、未だに解決されずにいる「観衆論」、「大衆性論争」はこの日本の新派の影響が強かったと言える。

平成23年度には、激しい論争になった「小劇場運動と大衆劇」、「翻訳劇の問題」、「伝統劇の価値」の問題を中心に研究を行った。その結果、韓国の新派劇と新劇は公演レパートリーを見ると日本を模倣する方式で始まったことが明らかになった。しかし、このような傾向は1930年代から大きく変化し始めた。韓国国内でも「小劇場運動」の限界について認識するようになったことがそのきっかけであった。小劇場運動の代表として認識された「築地小劇場」の解散は韓国知識人にとっても大きな衝撃であった。特に、その現実的な理由が、経営上の赤字だったことから小劇場運動について否定的に考える演劇人も増え始めた。このように韓国では築地小劇場の解散によって小劇場運動の「理想論」と「現実論」に対する議論が巻き起こったのである。本来の小劇場運動は大資本の影響から離れて自由に良い作品を作るために起きた運動だったが、少数の観客だけでは成り立たないという現実的な問題を改めて認識するようになった。勿論、この問題を解決する最も簡単な方法は大衆が見て楽しめる軽い興行劇を公演することだった。しかし、それは小劇場運動の目標とは正反対の演劇だったので有り得ないことであった。このように築地小劇場の解散は、韓国新劇界に小劇場運動のあり方についてさまざまな議論を呼び、演劇界の小劇場論争を深める機会を与えた。

小劇場と翻訳劇に関する論争は劇芸術研究会においても大きな問題であった。結局、1935年頃からは劇芸術研究会でも創作劇を中心にレパートリーを変えようとする動きが起き始めた。このような変化の最も大きな理由は、観客が翻訳劇を正しく理解できなくなったということであった。柳致真を中心に変化が始まったが、この変化は劇芸術研究会の大多数を占めていた「海外文学派」の暗黙の了解を得たので可能だった。柳致真は創作劇が重要である理由を2つ挙げて説明した。1つはぎこちない外国人の演技に慣れると正しく感情表現ができない俳優になること、もう1つは創作劇の力を借りずには観衆の興味を引くことができないということである。日本新劇の失敗の原因を「劇作家の欠陥と俳優術の未熟さ」と説明し、韓国演劇界も日本新劇界と同じ失敗をしないように警戒した。日本の新劇界では翻訳劇を過信した結果、俳優も知らな

いうちに外国人の生活演技に慣れてしまう奇妙な現象が起こったと批判した。結局、人間感情の細かい表現ができなくなり、これによって俳優術は劣悪な状況に落ちてしまった。また劇作家の発掘にも関心を傾けなかったことで、劇作家の不足につながり、これが日本新劇界の総体的な問題の原因になったという見解である。このように韓国の演劇人は日本の新劇界を常に念頭に置いて自分の演劇論を繰り広げたのである。

「伝統劇の価値」に関する認識も日本新劇においての浄瑠璃と歌舞伎への関心と似ていた。しかし、実際には大きな差があった。日本では浄瑠璃と歌舞伎の様式美に注目したとすれば、韓国では原形的な形式と内容を包括的に注目した。特に、朝鮮半島の伝統劇である「山台劇」と「五広大劇」を理想的な演劇形態として認識した。伝統劇を理想的な演劇様式として認識した代表的な理論家が、柳致真である。彼の伝統劇に対する肯定的な認識は、山台劇と五広大の属性に関する説明にもそのまま現れる。柳致真は演劇の本質を「大衆性」と規定し、このような本質が山台劇と五広大にはそのまま内在していると主張した。山台劇と五広大は職業俳優ではなく、民衆によって作られて観客もまさに民衆であった。結局、山台劇と五広大は民衆自ら創作して楽しんだ娯楽であり、演劇が持っている崇高な理想である「大衆性」を最もよく表した形態であった。

伝統劇に対する肯定的な立場は、日本の傾向と同じように海外演劇を見た後、一層強化された。柳致真は1956年6月13日から1957年6月29日まで米国、英国、フランスの現代演劇を観劇した。この体験を通し、欧米演劇人は新しい演劇的な刺激を求めており、その結果「東洋的なものへ憧れ」の傾向が流行していることが分かった。この発見から柳致真は若い時から演劇の本源的な特徴を持っていると考えた「山台劇」と「五広大」の価値について改めて認識した。自分の見解が間違いではないことを欧米演劇人から認めてもらったためである。

しかし、過度に伝統劇の価値を重視する認識は、劇形式という具体性が欠如し、理想的な民族劇を作らなければならないという正当性だけが強調された。結局、実体は曖昧になり、難解な虚像だけの論争にとどまったという限界があった。

平成24年度には、日韓の影響関係を客観的に立証できる公演資料と新聞記事を中心に、資料収集と分析作業を行った。その結果、韓国近代演劇界の「翻訳劇と創作劇の論争」、「古典芸能に対する再認識」、「新派と新劇の影響関係」、「小劇場運動の成功と失敗」とい

う特徴が、日本の近代劇理論から影響を受けていることが明らかになった。

「翻訳劇と創作劇の論争」は、翻訳劇の盲信論と効用論の対立から始まったが、結果的には新劇界の内部的な批判として発展した。この論争は日本でも韓国でも、過度に翻訳劇だけを重要視する傾向に対する問題提起としての意味が強かった。特に、1920年代の新劇界の翻訳劇論争は、過去の翻訳劇「盲信論」と「効用論」に対する論争とは違った。むしろこの時期の翻訳劇論争は新劇界内部の批判という性格が強かった。築地小劇場を作った小山内薫は、1920年代を新劇運動の暗黒期だと定義した。その理由は新鮮味がない既存の劇作家にあると指摘した。小山内は既存の創作劇には何の情熱も感じられない程度にレベルが低いと批判し、新劇の台本には歌舞伎や新派の台本と殆ど差がないと断言した。このような過激な批判は、新劇内部の問題を強調するための方法だった。

「古典芸能に対する再認識」は、歌舞伎俳優の価値を高く評価した日本の新劇理論が韓国演劇界にも影響を与えた。韓国でも古典仮面劇を、新しい価値がある劇様式として再認識するようになった。しかし、韓国の演劇人は小山内薫の歌舞伎研究について正確に理解できず、単純に伝統を重要視したと理解した。彼は1912年から1913年まで欧米劇場を見学した後、俳優の価値を新しく認識した。日本に戻って直ぐ歌舞伎俳優の演技論について研究し始めた。小山内が日本の古典芸能に関心を持った理由は、台本の文学的な価値ではなく、舞台演出方式の価値を認めたためである。このような関心は「国性爺合戦」の公演で明確に現れた。新しいスペクタクルを作り出すために世界の様々な国の音楽、舞踊、パントマイムまで積極的に受け入れた。結局、歌舞伎には舞台表現の一つの材料として価値があると認識したのである。

「新派と新劇の影響関係」は、韓国近代演劇界において未だに論争が進行している問題である。この問題を解決する概念は、日本における「新劇の翻訳劇」と「新派の翻案劇」というはっきりした区分であった。このような区分は韓国の新派と新劇論争を解決する重要な概念となった。1900年代初頭から日本の演劇界内でも「翻案劇」と「翻訳劇」を明確に区分し始めた。できるだけ原作をそのまま翻訳した作品に対する欲求が強くなり、小山内も「翻案劇の時代」が終わって「翻訳劇の時代」が到来したと宣言した。その結果、新劇は翻訳劇、新派は翻案劇を公演するという区分が自然にできた。

特に新劇界における近代劇とは「イブセン以下、19世紀に確立するブルジョア社会に反抗する、あるいは批判の目を向ける演劇」である。このような基準から新派を見ると、基

本的に旧時代の価値を擁護する世界観を維持しているので、新派の劇団で前衛的な戯曲を翻案して公演をしてもそれは真の意味の近代劇としての資格がない、という論理である。

「小劇場運動の成功と失敗」は、日韓近代劇の影響関係を明確に現す項目であった。植民地朝鮮における1931年は、「劇芸術研究会」が結成された歴史的な年であった。日本留学を終えて戻った柳致鎮、金祐鎮、洪海星は劇芸術研究会の中心メンバーになった。彼らは日本の代表的な新劇団体だった築地小劇場の活動を自然に参考にするようになった。特に、洪海星は築地小劇場で俳優として活動したので、韓国演劇人の期待を一身に受けた。

このように築地小劇場は植民地演劇人にとって近代劇運動の模範的な事例であると同時に、克服しなければならない対象という二重的な地位を持っていた。なぜならば、1930年代の植民地知識人はすでに築地小劇場の演劇史的な意義と限界を把握していたためである。そのために築地小劇場は一方では憧れの対象であり、また一方では克服の対象だった。

言うまでもなく韓国の近代知識人は日本式の小劇場運動が抱えている劇団運営と観客動員の構造的な問題を既に理解していたにもかかわらず、小劇場運動をそのまま受け入れて同じ失敗を繰り返した。このように韓国の近代・現代劇理論の成立においては、日本の演劇理論の影響が強かったことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 金 鉉哲、築地小劇場における近代性の問題に関する研究 — 歌舞伎、新派、新劇を中心に、査読有、韓国演劇学会 48巻、2012、421-446
- ② 金 鉉哲、日本文化コンテンツの現在性と大衆性に関する研究、査読有、韓国学術研究 37巻、2011、5-32
- ③ 金 鉉哲、韓国新派劇における演劇史の意義に関する研究、査読有、韓国語教育研究 1巻、2011、50-63

〔学会発表〕(計2件)

- ① 金 鉉哲、築地小劇場における近代性の問題に関する研究、近代劇場の文化政治学と東アジア研究会、平成24年8月24日、ソウル高麗大学
- ② 金 鉉哲、日韓新派に関する研究、日本韓国語教育学会、平成22年11月14日、岩手県立大学アイーナキャンパス

〔図書〕（計 2 件）

- ①東北大学高等教育開発推進センター 編、
『植民地時代の文化と教育－朝鮮・台湾と日本』、東北大学出版会、2013、65～86 ページ
- ②アンナミル 編、『メディアと文化』、ソウル：青い思想社、2012、51～89 ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 鉉哲 (KIM HYEONCHEOL)
東北大学・高等教育開発推進センター・講師
研究者番号：80361210

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：